

サッカーから得た「パスの三原則」

山城31回 横田友伯

連想ゲームで「山城」というヒントが出たら、私は、間髪を入れずに「サッカー」と答えると思います。

私は中学校の時からサッカーを続けていたので、高校へ進学するなら山城高校しかないと思っていました。合格発表の時、私の受験番号は一番だったので、自分の番号を探す必要もなく、すぐに合格していることが分かりました。「よしっ!」と心の内で叫ぶと共に、これからは、山城でサッカーが出来るんだ、という大きな喜びが込み上げてきたことを記憶しています。

その日に、当時のサッカー部監督の森先生から、「明日から練習に来い」と言われ、翌日から私の山城でのサッカー漬けの生活がスタートしました。

その頃の校風は、それほど厳しくなかったためか、私は授業中でも机の下にサッカーボールを置いて、足で転がしていました。隣の席では、ラグビーボールにツバを付けて、ストツキン

グで必死に磨いている者もいました。顔だけは先生の方を向いているのに、よく見るとイヤホンでロックを聴きながらリズムを取っている者、いつの間にか教室から姿が消えている者など、私も含め、周りから見れば「変なヤツ」が何人かいたことを思い出すと今でも笑ってしまいます。また、昼休みや放課後には、中庭でギターを弾くグループがいたり、単に寝そべっているだけの者がいたり、何かにつけ個性的な生徒が数多くいたような気がします。

サッカー部の練習内容は一貫して、基本をしっかり身に付けたうえで、頭の中にさまざまな状況をイメージし、自分で考え判断することが、求められるものでした。

一途に練習に励んだ甲斐があつてか、一年生（昭和五十一年）のときに、日中親善のために、京都チームとして、かつての毛沢東時代の中国に、約一ヶ月間の遠征に連れて行っていただけなこと、二年生のときには、京都選抜の一員として、青森国体で準優勝したことがよい思い出となっています。

三年生になってキャプテンをしていた私は、試合での好結果を求めるあまり、部員に対して厳しすぎるがありました。そのようなときに、私は森先生から「パスの三原則」を教わりました。「パスの三原則」とは、パスのコース、強さ、タイミングのことです。

私のパスは強すぎたのだと思います。

パスはコースが外れるとつながらず、強ければ止められず、弱ければ届きません。タイミングがズレれば時期を逸します。パスといえばボールを使うゲームを思い起こしますが、ボールを使わない競技のミーティングでの会話、さまざまな会議、打ち合わせ等、社会生活での人と人とのコミュニケーションにも当てはまるものだと思います。

私はこのとき「先生はサッカーのことだけ言うたはるんとちがうんやな」と感じたことが大変強く印象に残っています。

現在も社会生活において、常に「パスの三原則」を忘れることなく、受け手の立場、状況を考慮し、思いやりのあるパスと、ときには厳しいパスを使い分けて出せるように心掛けています。

このたびの京三中・山城高創立百年事業におきましては、ご尽力いただきました本部役員の方々、校長先生をはじめとする現職の先生方、各学年幹事及び寄付をしてくださった方々の理解と協力をベースに、前述の「パスの三原則」が良好に機能したがゆえに開催に至ったものと確信しております。

百年間のうちの三年間でしたが、楽しく、充実した学校生活を送らせていただきましたことに、大変感謝しております。

京三中・山城高創立百年、誠におめでとうございます。